HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（２）：「政治と文学」
Author(s)	水溜, 真由美
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 147, 67(右)-103(右)
Issue Date	2015-12-21
DOI	10.14943/bgsl.147.r67
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/60415
Type	bulletin (article)
File Information	147_04_mizutamari.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bgsl.147.r67

堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（2）

――「政治と文学」

水溜 真由美

一 はじめに

本稿は、「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）――第三世界との出会い」[1]の続編である。アジア・アフリカ作家会議とは、一九五五年のアジア・アフリカ会議の直後に結成された反帝国主義・反植民地主義の立場に立つアジア・アフリカ諸国（第三世界）の作家による交流・連帯のための組織である。[2]堀田善衛は一九五六年一二月にニューデリーで開催された第一回アジア作家会議を皮切りに数十年間に渡ってこの運動に深く関わった。前稿では、堀田とアジア・アフリカ作家会議との関わりを、主として堀田が第三世界をどのように認識したのかという観点から論じた。本稿では、いわゆる「政治と文学」という問題を軸に検討したい。

アジア・アフリカ作家会議は文学運動でありつつも政治運動としての性格を強く備えており、会の設立、運営には国や政治組織が深く関わった。また、当時の第三世界では文化人が政治的な役割を果たすことが少なくなかった。その一つの帰結というべきか、アジア・アフリカ作家会議は第三世界内部の政治に翻弄され、わけても六〇年代に深刻化した中ソ対立は会の分裂をもたらした。

設立当初から会の運営に深く関わった堀田は諸国間の調整役として多大な苦労をした。文学運動でありつつも政治に傾斜したアジア・アフリカ作家会議において堀田が直面した問題は、敗戦後まもない時期に「政治と文学」論争の中で提起された問題と重なる。「政治と文学」論争とは、『近代文学』の同人である荒正人、平野謙らと、『新日本文学』の発起人で戦前のプロレタリア文学の中核的な担い手だった中野重治らとの間で戦わされた論争であり、かつてのプロレタリア文学運動を批判的に問い直す意味を持つものだった。この論争の中で、『近代文学』派は、「政治」と「文学」の関わりやオルタナティブな「政治」のあり方について原理的な問題提起を行った。

堀田は戦後派作家の一人であるが、やや若く（一九一八年生まれ）、アジア・アフリカ作家会議の運動にコミットする以前に左翼運動に参加した経験を持っていない。また、堀田は『近代文学』の同人でも新日本文学会の会員でもなかった上、「政治と文学」論争が展開されていた当時は中国に滞在していた。堀田はアジア・アフリカ作家会議の運動において初めて「政治と文学」の問題に直面したといってよい。ただし、戦中・戦後の中国において抗日戦争や国共内戦を目の当たりにした堀田にとって、第三世界の解放運動に伴う様々な困難や矛盾は既知の事柄でもあった。

先述の通り、本稿では、堀田のアジア・アフリカ作家会議への関わりを「政治と文学」の問題を軸に検討するが、アジア・アフリカ作家会議の運動に最大の困難を持ちこんだ「政治的」要因は中ソ対立だった。アジア・アフリカ作

家会議は中ソ対立によって一九六六年に分裂し、日本の国内組織だったアジア・アフリカ作家会議日本協議会も一九六七年に分裂した。第二章では、堀田が中ソ対立をどのように理解したのか、また、アジア・アフリカ作家会議と日本協議会に中ソ対立が持ち込まれ分裂に至る過程で堀田がこの問題をどう捉え、またどのようにふるまったのかについて考察したい。

中ソ対立のほかにアジア・アフリカ作家会議に影を落とした「政治的」な出来事として一九六八年のチェコ事件がある。一九六八年八月、ワルシャワ条約機構はソ連を主力とする五ヶ国軍をチェコスロヴァキアに派遣し、チェコスロヴァキアの民主化運動（「プラハの春」）を弾圧した。中ソ対立と異なり、チェコ事件はアジア・アフリカ作家会議の運動にさほど大きな影響を与えたわけではないが、チェコ事件のただ中で一〇周年記念集会に出席した堀田は、チェコ事件をめぐる会の姿勢を文学運動に課せられた一種の試金石として捉えた。第三章では、主として「小国の運命・大国の運命」[3]に依拠しながら、一〇周年記念集会をめぐる堀田の考察とこの記念集会の中で堀田が示した抵抗の姿勢について考察したい。

一〇周年記念集会の後、堀田はチェコスロヴァキアを訪問した。堀田は、その体験を「小国の運命・大国の運命」にまとめたが、「大国」対「小国」というフレームを提示しながらチェコスロヴァキアの民主化運動である「プラハの春」に大きな可能性を認めた。同時に堀田は、「プラハの春」に見られる「小国」の「大国」に対する異議申し立ての動きを、世界的な潮流となりつつある第三世界の資本主義・社会主義両体制に対する抵抗運動と関連づけた。第四章では、これらの考察の中に、中ソ対立に対するアンチテーゼの意味を含んだオルタナティヴな「政治」の構想を読み取りたい。

二　中ソ対立と会の分裂

中ソ対立とは、ソ連共産党と中国共産党の間の国際共産主義運動の路線対立で一九六〇年前後より本格化した。一九五〇年代後半より、国際共産主義運動の路線として、ソ連は平和共存・平和移行、中国は武力闘争による民族解放という対立的なヴィジョンを掲げていた。また多くの論者が指摘するとおり、中ソ対立にはこうした路線対立のほかに両国の矛盾する国益や互いに対する複雑な感情が絡んでいた[4]。ソ連と中国は共産主義陣営および第三世界の解放運動において指導的立場にある二大国であったため、両国の対立はヘゲモニー争いの様相を呈し、共産主義・第三世界の運動に深刻な分裂を持ち込んだ。アジア・アフリカ作家会議も中ソ対立によって分裂した。

前稿「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）」の繰り返しになるが、まずはその大まかな経緯を確認しておきたい。一九六六年初め、中国派はベトナム支援の名目で北京における緊急大会の開催を常設書記局に呼びかけ承認を得た。他方のソ連派はカイロで常設書記局会議を開催し緊急大会に反対する旨の意思表示を行ったが、中国派はソ連を除名した上で緊急大会を強行した。他方で、ソ連派もバクーにおいて独自にベトナム支援のための緊急大会を開催した。この後、中国派は文化大革命の混乱の中で有名無実化し、他方のソ連派は一九六七年のベイルートにおける第三回アジア・アフリカ作家会議（以下、第三回大会と略記）を皮切りに運動を軌道に乗せた。

前稿でも述べたとおり、中ソ対立はアジア・アフリカ作家会議日本協議会も分裂させた。日本では、一九六〇年代前半に中ソの核実験・核開発の評価をめぐって革新陣営に分裂が持ち込まれ、この動きが文学運動にも波及したこと

（一九六四年に新日本文学会が分裂し、翌年日本民主主義文学同盟が設立された）、日本共産党が中ソ対立において一度中国支持に舵を切った後に中国共産党と関係を悪化させたことから事態はより複雑であった。

栗原幸夫によれば、日本共産党と中国共産党との関係が密接になるにつれ、前者の日本協議会への干渉が強くなり、四月の総会で選出された委員の大半は共産党員とその「同調者」で占められた。同時に、機関誌『アジア・アフリカ通信』の編集・発行、アジア・アフリカ講座や講演会の企画・実行を担当していた企画委員会の旧メンバーは解任された。[5] 後述するように、堀田も一九六六年五月二日に事務長を辞任した。栗原は、インタビューにおいて当時の日本協議会の動向を、「代々木に乗っ取られるような形で、ＡＡ作家会議ははっきりと中国路線に転換して、堀田さんも事務局長を辞めちゃって（略）」と回想している。[6]

ところが、一九六六年春に日本共産党と中国共産党との関係が悪化し、日本共産党は「自主独立」路線に転換した。その結果、日本協議会は「北京派」、「自主独立派」、新日本文学会内におかれたリエゾンオフィスの三派に分裂し、一九六七年七月三〇日の委員会で「北京派」の委員の発案により総会を待たずに解散した。リエゾンオフィスは、一九六七年の第三回大会への代表派遣を契機として、一九七四年に日本アジア・アフリカ作家会議が組織されるまで日本におけるアジア・アフリカ作家会議の窓口となった。

次に、アジア・アフリカ作家会議の分裂をめぐる日本協議会の対応について見ておきたい。一九六六年三月、日本協議会は常設書記局会議の書記長から北京における緊急大会開催の提案を受け承認の意思表示を行った。[7] 他方、緊急大会に反対するアラブ連合のユーゼフ・エル・セバイは独自に常設書記局の構成国に招請状を送り六月一九日と二〇日にカイロで会議を開催した。日本協議会も招請状を受け取ったものの、書記長ではないセバイに書記局会議を開催

する権限はないと考え、これを黙殺した[8]。中国派はこの動きに対抗して六月七日と一〇日に北京で書記局会議を開催し、六月二七日から七月六日まで緊急大会を開催することを正式に決定した[9]。日本は、当初の予定通り緊急大会に一四名からなる代表団を派遣したが、先述のとおり、当時日本協議会のヘゲモニーは共産党に掌握されていた。「明らかに中国の反ソ・キャンペーンの一環としておこなわれた」緊急大会において、中国の要人は次々にソ連を攻撃した[10]。また本会議に先だって六月二三日に開催された常設書記局会議では、ソ連を除名処分とする声明を発表し議論を巻き起こした。日本代表は書記局会議においてソ連の除名を回避しようと努力したが、本会議では声明を承認した（ベトナム戦争でソ連の援助を受けていた南北ベトナムを含む一〇ヵ国は態度を保留した[11]）。

次に、一九六七年開催の第三回大会に対する新日本文学会ないしリエゾンオフィスの対応を見たい。竹内泰宏によると、一九六六年一一月五日に開催された新日本文学会常任幹事会において、第三回大会準備会議に事務局長の長谷川四郎の代理として竹内泰宏を派遣することが決定された。第三回大会以後、新日本文学会はアジア・アフリカ作家会議に集団メンバーとして加入し、一九七四年に日本アジア・アフリカ作家会議が設立されるまで、日本国内の文学者とカイロの常設事務局およびアジア・アフリカ諸国を結ぶリエゾンオフィス（連絡事務所）の役割を担った[12]。

新日本文学会が準備会議に代表を派遣することを決定した背景として、竹内は、「このまま放置しておけば、当分のあいだ日本とアジア・アフリカ諸国の文学者が直接接触する国際的ルートが一つもなくなってしまうだろうというという見とおし」があったと証言している。また竹内は、アジア・アフリカ作家会議を文学運動としての内実を伴う活動とすること、社会主義国間の「最終的な統一」を目指すことが準備会議にのぞむ新日本文学の立場だったと述べている[13]。

準備会議は一九六六年一一月一三日から一五日までカイロで開催され、一四ヵ国が参加した。[14] 中国にも招待状が送られたが、当然ながら中国は参加しなかった。中国は、一九六七年三月二四日から三一日にかけてベイルートで開催された第三回大会も欠席した。[15] 第三回大会において、日本代表は共産主義国間、第三世界間の統一を目指す立場を繰り返し表明した。「中国問題」は、「いわばこの大会の一番敏感なところに刺さっている棘（ママ）のようなもので、誰もが大いに気にしていながら手を触れようとしない」問題だったが、[16] 長谷川四郎は日本代表団のスピーチにおいて、「みなさんもごぞんじの通り、中国は歴史的に日本と最も近い友人であります」と述べ、また社会主義国家間の統一の必要を強調して会場から喝采を受けた。[17]

また、日本代表は大会宣言および諸決議の審議の場（第一分科会）で、「この会議にいくつかのＡＡ諸国代表が不在であること、とりわけアジアの、また世界の、最も重要な社会主義国の一つである中国が参加していないことを、われわれは、会議の責任において深く遺憾に思うものであり、この分裂をのりこえて、民族解放運動と社会主義諸国の緊密な統一をもたらすことが、われわれの緊急の課題であることを確認する」[18] という趣旨を含んだ決議案を議長団に提出した。だが、ソ連代表が中国についての言及に難色を示し、日本の決議案は紹介されずに終わった（日本代表はその修正案を大会宣言起草委員会に提出した）。

実行委員会の構成を検討した第三分科会では、堀田善衛が実行委員会の構成国を二〇とし、そのうち二つを中国とインドネシアのために空席にすることを提案した。この提案も激しい議論を呼んだが、最終的に、中国、インドネシア、ガーナを含む二七ヵ国を実行委員会の構成国とすることが決定された。さらに、閉会後に開催された常設書記局会議における挨拶の中で、日本代表は「民主的手続きの重要性」を強調した。これは、日本の決議案を民主的な討議

を経ずに反故にした第一分科会を念頭においた発言であった。[19]

第三回大会において日本代表団は、「この大会が分裂のための大会となることを望まない、という日本で託された課題を機会をとらえてつらぬこうとした」。[20]そして、おそらく部分的には日本代表団の働きかけが功を奏して第三回大会は「中国非難の分裂大会」になることを免れた。

前置きが長くなったが、堀田は中ソ対立をどのように捉えていたのだろうか。著作から判断する限り、そもそも堀田は、中ソを対立させた国際共産主義運動の路線については強い意見を持っておらず、中ソ対立を専らアジア・アフリカ諸国の連帯を阻む醜悪な党派対立として認識していたように思われる。

堀田は、「人、親しければ（中ソ抗争について）」[21]において、「中ソ抗争の議論の程度の低さと言ったら、それはもう文学者の会議としては恥ずべきほどのものであった」と述べ、当時ポーランドに亡命中であったトルコの詩人の、「ソ連はアメリカ帝国主義のスパイ飛行機U2を撃ち落としたが、中国はいまだに自由にとばせているではないか」という発言を例に挙げている（第一四巻六八二頁）。「我慢について――インターナショナリズムというもの」[22]では、ある会議でソ連代表の演説が終わった後に入場したある社会主義国の代表が、ソ連代表の演説を聴いていないにもかかわらず、「自分はソ連代表の意見を支持するものである」と述べたことを「バカげたようなこと」だと述べている（第一四巻五五五頁）。また、「中国を考える」[23]では、ソ連のショーロホフが日本文芸家協会に招かれて来日した際に、中国の文化界が「ひどく低級な批判」を行ったことを例に挙げ、「中ソ抗争の激化以後、常識的な礼節の感覚さえが異常化しているのではないか」と苦言を呈している（第一四巻四九九―五〇〇頁）。

「人、親しければ（ミラ・サルガニィク夫人）[24]」では、「中ソ喧嘩のはじまりを印する」、「忘れがたい集り」であった一九六二年のカイロにおける第二回大会のエピソードが詳しく語られている。第二回大会で堀田は事務局長代理として運動報告を行うことになったが、中国代表の楊朔が、この報告の中に「“U.S. Imperialism is Public Enemy No.1”という字句をどうあっても入れなければならぬと顔を真赤にして主張をした」。堀田は、「アメリカ帝国主義が敵であることには異論はない、しかし、Public Enemy No.1といった言い方は、これはシカゴのギャング用語であって、あまりにはしたない表現であり、文学運動の報告のなかに入って来るに適当なことばではない」と反対したものの、楊朔の「ただならぬ」態度に圧倒されてしまった。しかし、運動報告を読み上げる際、「どうしてもこの下品な言い方に抵抗があり、その字句のところだけ飛ばして読まなかった」（全集一四巻六七四―六七五頁）。ささやかながら勇気を伴う抵抗だったが、結果的に読み違えたと解釈されて事なきを得たという。

より大胆な抵抗は、一九六八年にタシケントで開催された一〇周年記念集会の場で行われた。スピーチを行った堀田は、アジア・アフリカ作家会議の歩みを中ソ対立に力点をおいてふり返り、この集会に中国の作家が不在であることを指摘した[25]。この大胆な発言は、記念集会の直前に生じたチェコ事件に対する抗議の意思表示でもあった（次章で詳述）。

このように、堀田は文学運動に持ち込まれたあからさまな「政治」の論理に対して陰に陽に抵抗した。第二回大会の直後に書かれた「A・A作家会議裏方の弁[26]」において、堀田は「モスクワへ行っても、カイロ、北京、デリーなどでも、正直に言って、私は愉快な思いをすることが、真実、あまり多くない」（第一四巻六四八頁）と述べ、「裏方役」の多大な苦労について語っている。堀田はこのエッセイの中で、「文士の国際的会議」に対する絶望を表明し、時とし

て「なにもかも放り出し」たい気持ちになることを吐露しつつ、「しかもなお」、「裏方役」に踏みとどまっていると述べる。おそらくその理由は、会の理念に対する共感であり、第三世界の状況に対する日本の作家としての責任意識であり、また共に運動を進めてきた海外の作家たちに対する同志意識ないし義理であり、そして「A・A作家会議裏方の弁」で言及されているような政治的な議論の中に顔をのぞかせる「人間的なもの」に対する作家的興味でもあっただろう。別の場所では、堀田はインターナショナリズムとは「我慢」であると述べている。[27] 各国の多様な事情、多様な考え方を受け入れながら、粘り強く運動に関わった堀田の姿勢を如実に示す発言と言える。

さて、中ソ間の対立において堀田は終始調整役であり続けたが、組織の分裂後はソ連派に与し（先述の通り、中国派は有名無実化した）、国内では新日本文学会内におかれたリエゾンオフィスと歩調を合わせた。先述したように、国内では、一九六五年四月の総会を機に共産党系の作家が新日本文学会系の作家を排除し日本協議会のヘゲモニーを掌握した。堀田はその直後から事務長の辞任を検討していたようだが、[28] 一九六六年五月二日に遂に事務長を辞任した。

『会報』第六号（一九六六年六月二一日）には堀田の「事務長辞任ついて」と題した文章が掲載されている。ここで堀田は体調不良を事務長辞任の理由とする一方で、中ソ間の対立に翻弄されるアジア・アフリカ作家会議をめぐる現状を「眼を蔽わしむる」状況と形容し、「この文学の面における解放運動が、国家エゴイズムによってもし明白に分裂するようでしたら、会からも私は去るつもりですが、日本協議会の努力によってこの共同の運動の統一的な再建がなされるよう、心から希望するものです」と書いている。[29]

統一を志向する姿勢は、一九六七年二月に日本協議会委員会にあてて書かれた「アジア・アフリカ作家会議日本協議会の現状及び運営について」[30] でも明確に表明されている。ここで堀田は分裂のきっかけとなった北京における緊急

会議について、「一応の手続を踏んだ」ものの構成国（ソ連）を除名したため「結果としては規約違反」、すでに準備が進められていたソ連派による第三回大会については「開催手続において規約違反」と述べている。また、結果として両者を「諒承」し、「会員諸氏の判断と意見は自由」とする日本協議会の矛盾を指摘し、「もし北京、ベイルートの両者を、日本協議会として認めて行くとすれば、遠い将来における両者の統一を希望して、という、未来に力点をおいた、一種の統一戦線に立たざるをえない筈です」、「一種の「統一戦線論」に、日本協議会がはっきりとたつのでない限り、日本協議会の枠内における私の活動は終ったものと考えます」と述べている（第一四巻六六三―六六四頁）。

このように、堀田は終始統一を志向する立場に立っていたが、右の文書を同封した中野重治あての書簡では[31]、日本協議会の解散を提案したいとも述べている。当時、堀田は日本協議会内の分裂はもはや修復不可能な段階にあると考えていたのであろう（先述の通り、日本協議会は「北京派」の委員の提案により一九六七年七月末に解散した）。

堀田が一九六七年三月にソ連派によって開催された第三回大会に参加し、分科会の場で中国を実行委員会の構成国とする提案を行ったことについては先述したとおりである。堀田は大会開始の約二週間前に当たる三月一〇日にモスクワ入りし、ソ連作家同盟と打ち合わせを行ったようだ[32]。モスクワから野間宏にあてて送られた書簡からは、堀田がソ連作家同盟から厚い信頼を受け、第三回大会において「楽屋裏の全体」を担ったことがうかがえる[33]。ちなみに、新日本文学会のメンバーでなかった堀田は、モスクワで日本代表団のリストを見た後に日本代表団の構成員として第三回大会に参加することを決断したようだ[34]。

三　チェコ事件と一〇周年記念集会

一九六八年八月一六日、堀田はソ連作家同盟から一通の電報を受け取った。[35] 九月二一日から四日間、タシケントで開催されるアジア・アフリカ作家会議一〇周年を記念する文学シンポジウム（以下、一〇周年記念集会）への招待だった。堀田はしばらく返事を出さすにいたが、折しもソ連軍を主力とするワルシャワ条約五ヵ国軍が民主化運動を展開するチェコスロヴァキアに侵攻し八月二一日には全土を占領下においた。[36] 堀田は、軍事介入の事実が明らかになった直後に一〇周年記念集会への参加を決断した。[37]

「堀田善衛年譜」[38] によると、堀田は九月一九日に日本を出発し、その約三ヶ月後の一二月二四日に日本に帰国した。この間堀田は、九月二〇日から二五日までタシケントで開催された一〇周年記念集会に出席したほか、ヘルシンキ、ストックホルム、ロンドン、パリ、プラハ、スロヴァキア、ウィーン、東独などヨーロッパ各地を訪問した。

なぜ堀田はワルシャワ条約軍の介入後に旅に出ることを決断したのか。堀田にとってこの旅の目的は何だったのか。堀田は『小国の運命・大国の運命』の「はじめに」において、丸山眞男や久野収らが提唱した抗議声明[39] に署名しなかったと述べ、その理由の一つを「自分で行って自分でたしかめてからにしたかった」ためと説明している。実際、堀田はチェコスロヴァキアに「前後二回、約一ヵ月」滞在し、帰国後「小国の運命・大国の運命」を執筆し、自らの見聞に基づいて「プラハの春」とチェコ事件について詳しく論じた。だが、それだけではない。一〇周年記念集会に集うアジア・アフリカ作家会議のメンバーの反応を見ることも旅の大きな目的だった。堀田は一〇周年記念集会に参加し、

同時にチェコスロヴァキアを始めヨーロッパ各地を旅行した動機について、「長年の友人である彼らの作家たちがどんな顔をして何を言うか、このことだけをでもたしかめてみようと思い立った」（第九巻四四八頁）、「私の関心が、（略）第三世界の人々がこれ［ワルシャワ条約軍による出兵、占領――引用者注］をどう考えてくれるか、それを知りたい、という点に集中して行くことを、自分に感じていた」（第九巻四四九頁）と述べている。

「小国の運命・大国の運命」から判断する限り、一〇周年記念集会における堀田の関心は、「長年の友人である彼らの作家たち」の中でも、ソ連作家同盟に所属するソ連の作家たちに向けられた。ソ連作家同盟は、文学者の組織だが、アジア・アフリカ作家会議日本協議会や新日本文学会などとは異なり国家の統制下にあった公的な団体である。また、ソ連作家同盟はアジア・アフリカ作家会議の中心的な担い手であり、ソ連は一〇周年記念集会のホスト国でもあった。つまり、ソ連作家同盟はチェコ事件について全くの局外者、第三者とは言い難い立場にあった。また、そもそも軍事介入はアジア・アフリカ作家会議の思想的バックボーンの一つであった社会主義の理念に対する裏切りでもあった。以上のような点から、堀田は、ソ連の作家たちが何を考え、彼ら彼女らが一〇周年記念集会においてどのような発言をするか知りたいと切実に感じたのであろう。堀田は、チェコ事件に対するソ連の作家たちの反応をアジア・アフリカ作家会議の運動の試金石とみなしたといっても過言ではない。

とはいえ、堀田は問われているのはソ連の作家だけでないことも自覚していた。一〇周年記念集会に参加することは、他国の作家にとってもワルシャワ条約軍の軍事介入に加担する意味を持ちかねない行為だった。堀田は、日本を発つ前に妻から投げかけられた「それでも、あなたは行くの？」という言葉について、「それはまったくその通りであって、私自身でも、いったいこれでもおれは行くのか、と自分に問いつづけていたものである」（第九巻四四九頁）と書

いている。また堀田は、タシケントで各国の作家たちに再会した際、互いに「君は来たのか、やっぱり……？」、「君も来たのか、なぜ……？」といった「猜疑」の気持ちを向け合ったこと、そして共犯者的な意識を抱いたことに触れている（第九巻四五七頁）。ちなみに、会場に堀田が再会を強く望んでいたアルジェリアの作家の姿はなかった。アルジェリア作家同盟は一致してワルシャワ条約軍によるチェコスロヴァキア占領に反対声明を出し、記念集会への参加を拒否した。

それでは、一〇周年記念集会におけるソ連の作家たちの態度はどのようなものだったのか。公式の場ではチェコ事件について何も語られなかったようで、堀田は違和感を抱くと共にいたく失望したようである。記念集会は、ソ連における「会議」、「会合」が通常そうであるように、「人を圧伏するようなふんいき」の下で、官僚主義的、形式主義的、非民主的な仕方で進められた。議長団は、アジア・アフリカ作家会議の事務局長であるセバイのほかはソ連の作家によって独占されていた。シンポジウムのテーマは「文学におけるナショナリズムとインタナショナリズム」であったが、ソ連とチェコスロヴァキアのインターナショナルな関係については語られなかったばかりか、「インタナショナリズム」の名の下で専らソ連邦の国内問題が論じられていた。しかも、多民族国家、連邦国家であるソ連内部の「インタナショナリズム」なるものは、諸共和国間、諸言語間の翻訳書の発行部数によって「量的」に語られた。堀田はこれを「棍棒のような議論」であると評している。

一方、夜の宴会ではチェコ事件をめぐる率直な意見が飛び交った。「チェコスロヴァキア占領には、自分は反対だ、だが反対だと公表する勇気が自分にはない、だからおれは偽善者だ！」という痛切な叫びが発せられる一方で、「チェコスロヴァキアにおいてソ連兵一〇万の死者を出して得た権益を、なんでムザムザと西欧にわたしてたまるものか」というエゴイズムに満ちた見解も吐露された（第九巻四六二頁）。堀田は、このように私的な場所でだけ率直に意見が

交わされるソ連の体制を不健全だと評している。

他方で堀田は、ソ連の作家の態度や言葉の端々から彼ら彼女らの苦しい胸の内を汲み取っている。ある作家は堀田に再会するや否や、無言で手書きのW・H・オデーンの詩「一九六八年八月」を差し出した。「一九六八年八月」は、ソ連ないしワルシャワ条約軍を人喰い鬼（ogre）にたとえつつチェコ事件を痛烈に批判した詩である。また、ある作家は、「いったい、あなた方はインタナショナリズムの問題としての、今回のチェコスロヴァキアへの出兵について頬かむりをしてしまうつもりなのか？」という堀田の問いに対して、片目をつぶりながら「チェコスロヴァキアはアジア、アフリカではないから、ということになっている」と述べた上で、「どうかその問題だけはもち出さないでほしい。もち出されると、実はわれわれが困る」と付け加えた（第九巻四六九―四七〇頁、傍点堀田）。堀田は、この言葉から、ソ連の作家たちが「われわれ」と「奴ら」の間に「明瞭な対比」と「断絶」を感じていることを読み取った。またある詩人は、「奴ら（政治の方）はいろいろなことをする。よいこともすればわるいこともする。しかし、最小限、モスクワの秋は美しいとは思わぬか」と述べた（第九巻四七二頁）。堀田は、五〇万もの軍隊を出動させたチェコ事件を棚上げするこの言葉に反発を感じつつも、詩人の目に「光るもの」を認めたため反論を差し控えた。

堀田はストックホルムから中野重治あてに送られた手紙の中で、「ところで、ソヴェトの知識人たちの苦しみ方というものは、（略）こちらが怖しくなるほどに深くて苦しいものです。一言で言って、上層部はいったい何をしてくれたのか、ということで、中央のjustificationをどうにか呑み下しはするものの、「独ソ協定が西欧の（当時）知識人に与えたと同じ打撃です」というのが、おそらくはもっとも簡潔な要約ということになりましょう」と述べている。[40] 堀田は、軍事介入を正面から批判する言葉こそ聞かなかったものの、ソ連の作家たちが当局に対する批判を抱き良心の呵

責を感じていることを理解した。もちろん、それが可能であったのは、堀田とソ連の作家のたち間に深い信頼関係が存在し、そして堀田が彼ら彼女らの心の内を理解しようと努力したためでもある。

そもそも堀田は、ソ連の作家が公の場でたやすく国家の方針を批判できないこと、それを求めることが彼ら彼女らを苦境に陥れるということをよく知っていた。だからこそ堀田は、「小国の運命・大国の運命」においてソ連の作家たちを傷つけないよう細心の注意を払った。堀田は、後述のアレクセイ・スルコフ氏をのぞいて、ソ連および他国の作家について実名はおろか人物の特定につながる情報を一切記していない。

にもかかわらず、堀田は作家たちの秘められた良心を慮ることで事足れりとはしなかった。堀田には、一〇周年記念集会の参加者にチェコ事件について問いたださずにはいられない、やむにやまれぬ気持ちがあった。堀田はそれを知識人の、またアジア・アフリカ作家会議の運動に携わる者の責務だと考えたのであろう。堀田は、ある文章の中で、チェコスロヴァキア訪問の際、ソ連の作家の「同情」を伝え聞いたチェコヴァキアの作家が「はきすてるように」述べた「奴らはいつでもこうなのだ！」という言葉を記録し、ソ連国内における行動を伴わない「同情」が「批評としての機能」を欠くものであると記している。(41)

堀田は、作家同盟の最古参の幹部で第一回アジア作家会議以来の親しい友人であるスルコフ氏にチェコ事件について、「公式の面会」さえ試みた。スルコフ氏は、第三次世界大戦を回避するためという理由でソ連による出兵を正当化したが、同時に誠心誠意を込めて出兵に多くの苦痛を伴ったことを述べ、またこの出兵によって、サルトル、ボーヴォワール、アラゴン、ラッセル、グレアム・グリーンなど西側の貴重な友人を多数失ったことを耐え難いことだと語った。堀田は、スルコフ氏の苦衷を推し量りつつも、彼に向かって「了解した」とは言わなかった。否、言えなかった。

堀田の頑なな気持ちは、一〇周年記念集会におけるスピーチ[42]において十二分に表現された。このスピーチで、堀田はアジア・アフリカ作家会議の一〇年間を自身の体験を基にしてふり返ったが、まず初めに一九五六年に開催された第一回アジア作家会議の感動的な思い出を語った。

The atmosphere of the Secretariat and of the Conference itself was warm and friendly, really friendly, I assure you. Real internationalism was realized, this also I assure you.

（書記局および大会そのものの雰囲気は、暖かく友情に満ちていました。本当に、友情に満ちていました。これは、たしかなことです。そして、真のインターナショナリズムが実現されました。これもまた、たしかなことです。）

ところが、一九六一年以降状況が変化し始めた。

Some dark cloud and noisy thunder came over our heads. Dark cloud covered us.

（私たちの頭上に黒い雲が立ちこめ、騒がしい雷鳴が聞こえて来ました。黒い雲が私たちを覆いました）。

もちろんこの変化をもたらしたものは、中ソ対立である。堀田は、中ソ対立が党派的な感情の衝突をもたらし理性的な議論を不可能にしたことを、次のような言葉で示唆している。

And in Cairo, the speeches of some member became not speeches, but thunder, I mean just shouting, angry shouting.
（そして、カイロにおける一部のメンバーのスピーチはスピーチではありませんでした。雷鳴でした。つまりそれはただの叫び、怒りに満ちた叫びでした。）

さらに堀田は、会が分裂した事実に触れ、この会場に中国の作家が不在であることを指摘する。

We missed and don't see, here, in this hall, some of our great friends, I mean friends from Peoples' Republic of China.
（ここ、つまりこの会場に、一部の偉大な友人たち、中華人民共和国の友人たちの姿がないのは残念です。）

堀田はこの事実についてコメントを差し控えるとしつつも、〝But true, we missed them. This is a cold fact, nobody can deny.（しかし実際に、彼らは我々の元からいなくなりました。このことは冷酷な事実であって誰も否定することはできません）〟と、中国の作家の不在を改めて強調している。

さらに、スピーチの終わりの方で、堀田はチェコ事件を念頭におきながら[43]、次のように述べている。

The international situation, nowadays, is tense, not so peaceful. And one action, political or ideological,

taken by one country against another country might provoke many disputes, now and in future too. This may not be a time for the celebration.

（今日、国際情勢は緊張しており、それほど平和的ではありません。そして、政治的なものであれイデオロギー的なものであれ、ある国が他の国に対抗してとる行為は、今日あるいは近い将来、多くの論争を引き起こしかねません。今は祝福の時ではないかもしれません）。

このように、堀田はアジア・アフリカ作家会議の一〇周年を祝う場で会の内紛について長々と述べ、またチェコ事件についても暗に言及しつつ、記念集会そのものに疑問を投げかけさえした。この挑発的なスピーチは、まさしく、チェコ事件の責任者であるソ連への、またチェコ事件に「頬かむり」して開催される欺瞞的な一〇周年記念集会への堀田の勇気ある抵抗であった。と同時に、このスピーチは、第一回アジア作家会議以来、アジア・アフリカ作家会議の運動にコミットし続けてきた堀田の、会に対する深い思い入れ、愛情の表現でもあった。

四　「小国」と第三世界

先述のとおり、一〇周年記念集会の後、堀田はヨーロッパ各地を訪れたが、そのうち約一カ月間をチェコスロヴァキアで過ごした。「小国の運命・大国の運命」の後半三分の二はヨーロッパ訪問記であるが、その中でももっとも中心的な位置を占めているのはチェコスロヴァキア訪問の記録である。

チェコスロヴァキア滞在中、堀田が特に関心を向けたのは、民主化運動と軍事介入についてのチェコスロヴァキアの人々の見解、心情、姿勢であった。「小国の運命・大国の運命」には堀田が出会った知識人や学生たちの言葉が数多く記録されているが、ここでも堀田は人々の身元が特定されるような情報を注意深く避けている。

堀田によれば、堀田が現地を訪れたとき、占領軍の弾圧は徐々に強まり状況は悪化していたが、一定の言論の自由は残されており、改革への希望は存続していた。民衆の間にソ連に対する徹底した嫌悪が広まる一方、絶望や諦観は未だ支配的ではなかった。

堀田は一九六八年に「プラハの春」が発生した背景を、チェコスロヴァキアの暴力的、非人間的な政治体制に帰している。とくに堀田は、「最暗黒期」であった一九四八年から五三年にかけて無慈悲な政治裁判、粛清が行われ、一六六人が死刑、一三八人が無期、約一〇万人が強制抑留に処せられたことを指摘し、「その春[プラハの春――引用者注]のどん底には重罪犯的なまでに暗いものが盤踞し、とぐろをまいている」（第九巻五三四頁）と述べている。

他方で堀田は、軍事介入後も粘り強く続けられる抵抗の中に、チェコスロヴァキアの伝統である「黒いユーモア」と「したたかな批評精神」を見出す。たとえば、ソ連の戦車の侵入が始まったとき、プラハの学生たちは「モスクワ・サーカス再来。ヴァツラフスキエ広場にて公演中。参観無料、ただし生命の保証はせず、また猛獣に餌をやるべからず」、あるいは「レーニンよ目をさませ、ブレジネフは気が狂ったぞ」と書かれたプラカードを掲げた（第九巻五一九頁）。また、占領軍が自己検閲を強制すると、大胆にも検閲官がテレビに出演し、「人民諸君、私は人類の歴史ではじめて公衆の面前に姿をあらわした検閲長官であります」と演説した（第九巻五一八頁）。ある人は堀田に、チェコスロヴァキアの国民は検閲を受けた文章を批判的に読む術を心得ていること、「ソ連軍」を「占領軍」と読みかえるような

民衆の間のラディカリズムこそが（民主派の）指導部を支えていると説明した。

こうしたラディカリズムの伝統は、「大国」に囲まれた「小国」としてのチェコスロヴァキア固有の状況の中で歴史的に培われた。隣にロシアという巨大な専制国家があったから、というだけではない。堀田はヤン・フスの焚刑からミュンヘン会談まで、チェコスロヴァキアが常にヨーロッパに「裏切られ」てきた歴史にも言及している。

もっとも堀田は、「面従腹背」の精神の裏付けを持つチェコスロヴァキアのブラックユーモアにユニークな抵抗の形を認める一方で、それがシニシズム、自嘲、自慰と紙一重であることも鋭く指摘している。たとえば、「兵士シュベイク」の一節、「兵士はなにがなんでも上官に服従する義務がある。たとえその上官が上官らしからぬものだろうがなんだろうが、だ。上官なるものは高度に重要な存在であって、お前たち、タダの兵隊なるものは、タマタマまぐれに存在するようなものにすぎない。すなわち、お前さんが存在していようがいまいが、そんなことは向う様の知ったことではないのだ」（第九巻五三八―五三九頁、傍点堀田）は、支配者に向けられた皮肉なのか、それとも服従者としての自嘲なのか。もちろん、この一節は「上官」に対する痛烈な毒を含んでいるし、それがナチの占領以前から存在するプラハの老舗のビアホールの壁に、英語、ロシア語、ドイツ語訳伴って掲げられていることからして、単なるシニシズムではあり得ないだろう。堀田は、「苛烈無惨な小国の歴史と運命」の中で培われたチェコスロヴァキア人のメンタリティ、政治文化を、日本人にとって徹底して異質な、不可解なものとして捉えている。

他方で、堀田は「プラハの春」を社会主義の立場から社会主義を問い直す試みとみなして深い共感を示す。「小国の運命・大国の運命」によると、堀田は、青春時代からレーニンに深い信愛を抱き社会主義について多大な興味を持ち続けてきた。しかし、堀田はソ連を訪問するたびに「いったいこの国は果して社会主義国なのか」という違和感を抱

き、また中ソ対立では、社会主義の指導的な二大国間の醜悪な党派対立を目の当たりにした。だからこそ、堀田は「プラハの春」に既存の社会主義を刷新する大きな可能性を見出す。即ち、「現在では、社会主義とは何か、何が社会主義であるか、と問うている国々が、すなわち社会主義国であるという様相を呈してきている」（第九巻四八六頁）。

堀田はチェコスロヴァキアを訪問した際、「プラハの春」に対して連帯の意思表示をすべく、チェコスロヴァキア作家同盟に対して文書によるメッセージを残してきたという。[44] その中で堀田は、チェコスロヴァキア訪問の結果として以下の三点を確認したと述べている。

一、貴国において、一九六八年一月以後に開始された社会主義再生のための企図は、現在、社会主義諸国に於て、社会主義がその本来の意味において実現されるために必要であり、また、一つの危機に臨んでいる資本主義国における社会主義運動を再生させるために必要欠くべからざるものであること。

二、政治と文化の、相互の再生作用のためには、政治と文化の間における、相互の自由な批判が必要であり、そのためには言論の自由がつねに確立していなければならないこと。

三、作家が創造的な仕事をするためにも、以上の再生運動は如何なる條件の下においても必要であり、特にチェコスロヴァキアの作家たちが、困難なる條件下において、また現在の想像を越えた悪條件下にあっても、諸君が忍耐強い努力をつづけられていることに敬意を表し、またその努力がつづけられることを期待すること。

堀田はまた、「プラハの春」とチェコ事件を社会主義陣営の内部に止まらない、より大きな歴史の流れの中に位置づける。「小国の運命・大国の運命」というタイトルが示すように、堀田はソ連とチェコスロヴァキアの関係を「大国」対「小国」というフレームで捉え、これをベトナム戦争に重ね合わせる。

> 小国の運命が大国の運命にかかわらぬなどという時代では、現代がないことは、ヴェトナムとアメリカのそれを見てさえも明らかなことである（第九巻五五四頁）。

さらに、堀田は「プラハの春」を第三世界による先進国に対する異議申し立ての動きにも関連づける。今日の世界には、「小国」が「大国」を問い、「第三世界」が資本主義体制と社会主義体制の双方を問う大きな潮流が重なり合いながら存在している。

> （略）今日の資本主義体制も、社会主義体制も、おそらく第三世界の問題とどう相対するか、あるいは相対しうるかによってためされるという状況が展望されるはずである。チェコスロヴァキアは明白に第三世界ではない、しかし小国という観点から見れば、問題をつきつけられて、ためされているのは実は大国であるソヴェトの方であろう。そうしてヴェトナムは明白に第三世界に属し、ためされ、しごかれているのは、明白にアメリカの方である（第九巻五六四頁）。

堀田によると、こうした「小国」の「大国」に対する、また第三世界の資本主義・社会主義の両体制に対する問い直しは、「第一世界」をも巻き込みつつ世界的な潮流となりつつある。先に「小国の運命・大国の運命」の後半三分の二はヨーロッパ旅行記であると述べたが、堀田は、西欧諸国、とくにパリの知識人・学生の間で、第三世界に対する関心が高まっていることを指摘する。近年パリの本屋では、アジア、アフリカ、ラテン・アメリカの革命運動や革命理論についての本が「店頭にごろごろし」、容易に入手できるようになる一方、ソルジェニツィンやエフトゥシェンコを例外として、ロシア人によって書かれた社会主義、共産主義についての本は「きれいさっぱりと消えてしまった」。堀田は、パリの五月革命において、また東大や京大の大学紛争において、ホー・チ・ミン、〝チェ〟・ゲヴァラ、毛沢東の肖像やベトナム解放民族戦線の旗が掲げられたことにも注意を促す。

堀田は、先進国における第三世界への関心が、先進国内部の「現体制」と「既成反対勢力に対する失望」に根ざしていることを喝破しつつも（「先進国は自分のうちに、精神的道徳的衝迫を見出すことがむずかしくなってきているのではないか」（第九巻五六四頁））、また多くの第三世界の実情が先進国における理想からほど遠いものであることを認識しつつも（「第三世界の独立と解放という美名は美名としても、軍部クーデターがあるごとに、権力は次第に旧植民地時代の宗主国に抱きかかえられるに近いことになっていくのであって、独立と解放の叫びは名目だけといったことになりつつある」（第九巻四六四頁））、「小国」および第三世界が、「大国」および資本主義・社会主義の両体制に対して異議申し立てを行い、後者をラディカルに問い直す歴史の流れに、歴史的な必然性と正統性を認めている。この点は『小国の運命・大国の運命』全体の中心的なコンセプトにもなっている。

「小国の運命・大国の運命」は、一九六九年に筑摩書房から出版された『小国の運命・大国の運命』の表題作である

が、同書には、「小国の運命・大国の運命」のほか、「第三世界の栄光と悲惨について」[45]と「エルネスト・〝チェ〟・ゲヴァラと現代世界――インタナショナリズムの前途」[46]が収録されている。堀田は同書の「はじめに」において、「これらの三つの文章は、それぞれ相互に関連して一つの環をなすものと思われるので、ここに一緒におさめた」と述べている（第九巻四四三頁）。

「第三世界の栄光と悲惨について」は植民地主義批判である。この評論は、ラス・カサスを主題としつつ、植民地主義に伴う構造的な暴力の問題を、デュボイス、マルコムX、フランツ・ファノンなどの引用を交えながら論じたものである。[47]

「エルネスト・〝チェ〟・ゲヴァラと現代世界」では、今日の世界における第三世界による資本主義・社会主義両体制に対する異議申し立ての動きの持つ意味、可能性が詳しく論じられる。冒頭で堀田は、今日のインタナショナリズムの問題を「キューバからの照射によって」考えたいと述べる。かつて堀田はキューバ革命蜂起記念祝典に招待されてキューバを訪問したことがあり、その体験に基づいて一九六六年に『キューバ紀行』[48]を上梓した。同書で描かれる人間的なキューバ像はソ連型の共産主義国家の対極にある。

とはいえ、「エルネスト・〝チェ〟・ゲヴァラと現代世界」は、オルタナティヴな社会主義国家としてのキューバの現状に焦点を合わせた評論ではない。この評論は、「現代世界のもっとも痛切かつ大胆な批判者」としてのゲヴァラの二つの文章に即して展開される。一方は、ゲヴァラがキューバの工業相だった一九六五年二月にアルジェリアで開催されたアジア・アフリカ人民連帯機構会議第二回経済セミナーで行った演説であり、他方は、ゲヴァラがキューバを離れた後、一九六七年四月に発表された「三大陸人民連帯機構へのメッセージ」である。[49]堀田は、両者に第三世界から

の資本主義・社会主義の両体制に対するラディカルな問いかけを読み取っている。

前者において、ゲヴァラは、帝国主義国の富が低開発国の搾取を土台としてもたらされたこと、低開発国は帝国主義国の新植民地主義的な介入によって独立後も政治的・経済的困難に陥っていることを鋭く指摘する。その上で、ゲヴァラは低開発国と社会主義国が連帯して帝国主義と闘わねばならないと主張する。この主張は、低開発国であり社会主義国であるキューバの立場に立つ限り当然だろうが、堀田は、ゲヴァラが中ソに代表される社会主義国と低開発国の間に矛盾や利害対立を認めている点に注意を促す。

堀田によれば、ゲヴァラは現代社会における資本主義諸国、社会主義諸国、低開発諸国の三派鼎立状態をふまえた上で、「社会主義諸国は、西側の搾取国家との暗黙の共犯関係を解消する道徳的義務を負っている」（第九巻六一一頁）、「解放の道を歩み始めた諸国の開発は社会主義諸国の犠牲を求めている」（第九巻六〇九頁、傍点堀田）と主張する。ゲヴァラの言う社会主義国の「義務」、「犠牲」とは、具体的には、社会主義国が先進国がヘゲモニーを握る世界市場の論理を相対化し、低開発国との取引において低開発国の「開発が可能になるような」価格を認めること、低開発国の技術開発のために技術教育機関の設置や技術者の派遣などの援助を行うこと、ひいては資本主義的な世界市場に対抗して、新興国を帝国主義の政治的・経済的支配から解放するような「一大ブロック」を形成することなどを指す。

堀田は、このような「プロレタリア国際主義」が、対立を深めつつあった「中ソ双方に対する烈しい、いわば必死の警告」であることについても注意を促す（第九巻六〇八頁）。ゲヴァラは、抗争を続ける中ソの間にもはや「団結すべき理由」がないとしても、「共通の敵」である帝国主義者に対しては団結する義務があると主張する。堀田は、同様の主張をゲヴァラの「三大陸人民連帯機構へのメッセージ」からも読み取っている。このメッセージの中で、ゲヴァ

ラはベトナムがアメリカに対して孤独な闘いを続けている傍らで中ソ対立（「社会主義陣営の二大国の代表のあいだで、かなりまえから始まった悪罵とかけひきの争い」（第九巻六一九頁））が継続されていることの「罪」を告発し、「敵」に対する「団結の必要」を主張する。

つまり、ゲヴァラはキューバに代表される低開発国の視点に依りながら、社会主義のあるべき方向を見据えつつ、社会主義国と低開発国が広く団結することを呼びかけている。この呼びかけは、既存の国家体制を自明視し、あるいは近視眼的な国益や体面に囚われて大局を見失っている社会主義諸国の現状と、その結果生じた中ソ対立に対するアンチテーゼとしてとらえることができる。堀田は、このようなゲヴァラの考え方に、「後進国、低開発国の側にこそ、現代世界がもつべき、ポジティブな道徳が存している」（第九巻六一三頁）とするメッセージを読み取り、深い共感を示す。

もちろん、堀田自身が述べているように、当時、第三世界あるいは「小国」に社会変革の可能性を見ようとする姿勢は決して珍しいものではなかった。中国はともかくとして、[50] ソ連型の社会主義を批判し、チェコ、キューバの社会主義に可能性を見出し、アメリカと闘うベトナムを支持することは、六〇年代末の左派知識人に共通の考え方でさえあった。ただし、堀田に関する限り、こうした立場はアジア・アフリカ会議の運動に関わる中で、内発的に導き出されたものだ。

一九五〇年代に始まったアジア・アフリカ作家会議の運動は、共産主義陣営と第三世界の連帯を通じて進められてきた。もちろん、これはアジア・アフリカ作家会議の運動に限ったことではない。当時、第三世界の解放運動全体において、ソ連を中心とする共産主義国が第三世界の解放運動を支援し、第三世界の側も共産主義陣営に強い親近感を

抱くという構図が見られた（もちろん、第三世界の一部の国は共産主義国だった）。ベトナム戦争においてソ連と中国がベトナムを支援したように、この構図は六〇年代後半においても存続していたが、一九六〇年代に本格化した中ソ論争によって綻びを見せつつあった。他方で、チェコ事件は、スターリン批判、ハンガリー動乱後すでに低下していたソ連の評判をいっそう低下させ、中ソ論争と相俟って共産主義内部の分裂を明るみに出した。第三世界と共産主義陣営を取り巻くこうした歴史の流れが、アジア・アフリカ作家会議に極めて大きな影響を与えたことは本稿で詳しく論じたとおりである。

「堀田善衛とアジア・アフリカ作家会議（1）――第三世界との出会い」で論じたように、堀田はアジア・アフリカ作家会議に集う共産主義諸国と第三世界諸国の間に「後進国」としての共通点を見出し、両者の連帯を自然なものとみなしつつ、共産主義陣営および第三世界の帝国主義からの解放と主体的な国家形成を支援した。ところが、中ソ対立とチェコ事件は共産主義陣営の二大国への幻滅をもたらし、国家の介在の下で進められる文学運動の困難を痛感させたと思われる。堀田はその過程で、チェコスロヴァキア、キューバ、ベトナムによる闘い、異議申し立ての動きに一筋の光を見出した。

もちろん、だからといって堀田はアジア・アフリカ作家会議の運動から離脱することはなく、先述したように、中ソの分裂後はソ連を中心として再建された運動にコミットし続けた。堀田は、限界を知りつつも、既存の運動の中で可能な批判や問題提起を行い、同時に全面的に国家を代表しているわけではない生身の作家たちとの間に信頼関係、友情を育んだ。五〇年代半ばから六〇年代後半にかけて、第三世界の解放運動についての堀田の見解は部分的に変化あるいは成熟したが、アジア・アフリカ作家会議の運動に粘り強くコミットする姿勢は第一回アジア作家会議の開催

時から決して変わることがなかったと思われる。

五　まとめ

「政治と文学」論争において、『近代文学』派はかつてのプロレタリア文学運動における政治主義を批判して文学の自立性を主張した。『近代文学』派は文学が政治運動と一体化して政治的プロパガンダの道具となること、文学の価値が政治的な観点から測られることを拒否した。ただし、これらの主張が左翼的な政治的立場への共感と没政治的な文学に対する批判を前提としていることは無視されるべきではない。戦後派（と言っても、もちろん一枚岩ではないが）全体に視野を拡大すれば、「政治と文学」をめぐる彼らの問題提起には政治主義批判と文学主義批判の双方が含まれていた。『近代文学』の創刊時の同人は左翼運動やマルクス主義に強い親近感を持っていたからこそ、左翼文学運動の政治主義批判に力を注いだ。他方で左翼運動やマルクス主義に対する思い入れが少なく、『近代文学』創刊時の同人より若い世代に属していた加藤周一などは、敗戦直後に痛烈な文学主義批判を展開した。[51] 堀田は世代的にも立場的にも加藤と近かったが、一九四六年まで中国に滞在していた堀田のデビューは相対的に遅く、敗戦直後に加藤のような仕方で論客として頭角を現すことはなかった。ただし、文学主義批判は堀田にとって終生の思想的テーマとなった。[52]

さて、堀田はアジア・アフリカ作家会議の運動に関わる中で「政治と文学」の問題に直面した。もちろん、堀田のこの問題への関わりは「政治と文学」論争における『近代文学』派のそれとは大きく異なっていた。そもそも、アジア・アフリカ作家会議は第三世界各地で植民地独立闘争が進行しているただ中において第三世界の解放・連帯を推進

する目的で組織され、会の設立・運営には国家や政党が深く関わった。もちろんアジア・アフリカ作家会議は文化団体であり、その担い手は各国の作家、知識人だったが、会の活動が政治から自立して営まれる可能性はあり得なかった。また、中ソ対立による分裂以前は文学運動としての目立った成果を上げることもできなかったようだ[53]。

とはいえ、これを単なる組織の体質の問題に還元することはできない。少なくとも、アジア・アフリカ作家会議の設立当初、多くのアジア・アフリカ諸国では作家業が自立した職業として成り立ちがたい状況もあった[54]。堀田は、ソ連の作家の間に見られる「文学主義」が、構成国の中では例外に属するソ連の作家の恵まれた状況に依存すること、ソ連の作家がそのことに無自覚であることを鋭く指摘している[55]。ともあれ、アジア・アフリカ作家会議に参加する以上、堀田を含む日本の作家たちは、アジア・アフリカ作家会議の政治的理念とこの組織が政治の道具ないし回路としての役割を担うことを受け入れる必要があった。

そして結果的に、アジア・アフリカ作家会議は国家や党の論理にがんじがらめに縛られ、中ソ対立によって六〇年代半ばに分裂した。アジア・アフリカ作家会議における中ソ対立とは大国のヘゲモニーによる文化団体の政治的引き回しにほかならず、会の分裂によって第三世界諸国間の連帯を弱めたことは政治的に見ても大きな損失だった。中ソ対立をめぐる堀田やリエゾンコミッティに集った日本の作家たちの姿勢は、全体として、党派対立に歯止めをかけ会の統一を維持しようとするものであった。第一回アジア作家会議以来の古参のメンバーであった堀田は、運動の場に露骨な政治の言葉が持ち込まれることを抑制し、構成国、構成員間の対立を緩和すべく尽力した。もちろん堀田の力によって会の分裂を阻止し得る可能性はなかったが、コミュニストでなく、また類い希な忍耐力と柔軟性を備えていた堀田は諸国間の調整役として適任であったと言えるだろう。

さて、ソ連派を中心に組織が再建された後の一九六八年に、堀田は一〇周年記念集会に招待された。ほぼ同時期にチェコスロヴァキアの民主化運動に対するワルシャワ条約軍の介入が生じ、堀田は、この事件をめぐる参加者の態度、言動を観察することを目的として記念集会への招待に応じた。堀田は、国家権力に抵抗することが著しく困難なソ連の作家たちの事情を十二分に理解しつつも、彼ら彼女らから自立した作家としての言葉を引き出そうとした。また記念集会におけるスピーチでは、中ソ対立とその帰結としての会の分裂に詳しく言及し、チェコ事件についても暗に触れながら、今は一〇周年を祝福する状況にないとさえ述べた。記念集会において堀田が示したささやかながら勇気ある抵抗の姿勢には、民主化運動を軍事的に弾圧したソ連およびワルシャワ条約軍に対する批判のみでなく、文学運動の政治（国家）への従属、またそれを前提とする文学への立て籠もりに対する批判が明確に示されている。

ところで、一〇周年記念集会への参加後に堀田はチェコスロヴァキアほかのヨーロッパ諸国を訪問した。チェコスロヴァキアにおいて、堀田は軍事介入に抵抗しつつ継続される民主化運動の状況を目の当たりにした。同時に堀田は、チェコスロヴァキアが古くからロシアや周辺のヨーロッパ諸国に圧迫されてきた歴史を持ち、その歴史的条件の下で抵抗の精神を培ってきたことについても理解を深めた。その上で、堀田は、チェコスロヴァキアの社会主義をソ連型社会主義のアンチテーゼ、「大国」に対する「小国」のそれとして肯定的に意味づけた。同時に堀田は、このチェコスロヴァキアの動きを、アメリカと戦うベトナムや第三世界の立場から独自の問題提起を行うキューバの動きと関連づけながら、国際社会の中でマージナルな立場におかれた「小国」や第三世界が現代世界にオルタナティヴを提起する状況に大きな可能性を見出そうとした。この堀田の視点は当時の知識人の間で例外的なものであったわけではないが、共産主義陣営における二大国間の対立であった中ソ対立に翻弄されたアジア・アフリカ作家会議の運動に関わる中で

培われた点において、とりわけ大きな意義がある。

＊本稿では、神奈川近代文学館堀田善衛文庫に所蔵されている多数の未公開資料を紹介・引用させていただきました。資料の公開をご快諾下さった、堀田善衛氏の著作権継承者である堀田百合子様、中野重治氏の著作権継承者である鰕目卯女様、野間宏氏の著作権継承者である五十嵐桂様のご厚意に深く感謝いたします。また、資料の閲覧および公開について、神奈川近代文学館の職員の皆様に大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。

注

（1）『北海道大学文学研究科紀要』第一四四号、二〇一四年一一月。

（2）アジア・アフリカ作家会議の歩みについては、栗原幸夫「アジア・アフリカ作家運動小史」『歴史の道標から』れんが書房新社、一九八九年（初出は、『新日本文学』一九七三年八月号、『季刊ａａｌａ』第二号、一九八三年一二月、『信濃毎日新聞』一九八九年一月九、一〇日号）および天野恵一、水島たかし、田波亜央江による栗原幸夫へのインタビュー、「ＡＡ作家運動の軌跡」『未来形の過去から――無党の運動論に向って』インパクト出版会、二〇〇六年を参照。

（3）『朝日ジャーナル』に一九六九年一月一九日号から六月一五日号まで連載された後（休載あり）、『小国の運命・大国の運命』筑摩書房、一九六九年に収録された。『堀田善衛全集』第九巻所収。なお、本稿における堀田善衛の著作の引用は、原則として『堀田善衛全集』全一六巻、筑摩書房、一九九三―九四年に依拠する。引用を行う際は、本文中に巻数、頁数を記載する。

（4）中ソ対立については、菊池昌典ほか『中ソ対立――その基盤・歴史・理論』有斐閣、一九七六年、山極晃・毛里和子編『現代中国とソ連』日本国際問題研究所、一九八七年、毛里和子『中国とソ連』岩波書店、一九八九年などを参照。

（5）前掲栗原「アジア・アフリカ作家運動小史」、一三三頁。栗原によると、解任された企画委員会のメンバーとは、大江健三郎、竹内

実、開高健、栗原幸夫らであった。

(6) 前掲「AA作家運動の軌跡」、二一三頁。

(7) 『会報』第五号、一九六六年四月二〇日、一頁。霜多正次・窪田精・津田孝による座談会「アジア・アフリカ作家会議とベトナム人民支援のたたかい」『文化評論』第六〇号、一九六六年一〇月によると、緊急大会の開催に反対した国は、ソ連、インド、アラブ連合の三ヵ国である。

(8) 前掲霜田・窪田・津田「アジア・アフリカ作家会議とベトナム人民支援のたたかい」。実際には、緊急大会は七月六日から七月九日まで行われた。

(9) 『会報』第六号、一九六六年六月二二日、一頁。

(10) 前掲栗原「アジア・アフリカ作家運動小史」。日本代表団の人数は、前掲霜田・窪田・津田「アジア・アフリカ作家会議とベトナム人民支援のたたかい」による。

(11) 前掲霜田・窪田・津田「アジア・アフリカ作家会議とベトナム人民支援のたたかい」。

(12) 竹内泰宏「アジア・アフリカ作家会議の七年」『新日本文学』一九七三年八月号。長谷川四郎によると、長谷川はソ連作家同盟が主催したバクーにおけるベトナム支援のための緊急集会（一九六六年八月三〇日から九月一日まで開催）に出席した際、第三回大会について相談を受けた。長谷川は帰国後、この件を当時新日本文学会の事務局長であった武井昭夫に報告し、武井が堀田、野間宏、木下順二に相談して「ソビエト側の提案を受けいれること」を決定した。長谷川四郎「堀田善衛」『堀田善衛全集第七巻・月報八』筑摩書房、一九七五年一一月。

(13) 前掲竹内「アジア・アフリカ作家会議の七年」。

(14) 準備会議については、竹内泰宏「アジア・アフリカ作家会議カイロ準備会議の報告」『新日本文学』一九六七年三月号参照。

(15) 第三回大会については、日本代表団「アジア・アフリカ作家会議ベイルート大会報告」『新日本文学』一九六七年七月号参照。

(16) 同、一一〇頁。

(17) 長谷川四郎「日本代表団の演説――付・ベイルート雑感」『新日本文学』一九六七年七月号、一二八頁。

(18) 前掲「アジア・アフリカ作家会議ベイルート大会報告」、一一三頁。

(19) 針生一郎は第三回大会をめぐる座談会（針生のほか、北村美憲、鈴木道彦、竹内泰宏、長谷川四郎、江川卓が参加）において、第三回大会では、ソ連よりアラブ連合の方が反中国的であったと述べている。「パレスチナ・ベトナム・日本――ベイルート大会日本代表座談会」『新日本文学』一九六七年七月号。

(20) 前掲「アジア・アフリカ作家会議ベイルート大会報告」、一二二頁。

(21) 『ちくま』一九八〇年一〇月号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(22) 『展望』一九六五年一月号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(23) 『毎日新聞』一九六六年七月二六日夕刊。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(24) 『ちくま』一九八〇年八月号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(25) 神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵の一〇周年記念集会のスピーチの草稿（英文）による。なお、同文庫に所蔵されているスピーチの草稿は二種類あるが、本稿ではより完成稿に近いと判断された草稿に依拠する。

(26) 『週刊読書人』一九六二年四月一六日号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(27) 前掲「我慢について」。

(28) 一九六五年七月一〇付けの野間宏あての手紙に事務長辞任の意向が記されている（神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵）。

(29) 三頁。

(30) 『堀田善衛全集』第一四巻所収。この文書は、一九六七年二月二〇日の消印のある中野重治あての書簡にも同封されている（神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵）。堀田は中野にあてて、「はじめに先生と木下順二に送りました。御意見をえて、他の委員諸氏に送るつもりです。」と書いている。

(31) 注三〇参照。

(32) 神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵の「第三回アジア・アフリカ作家会議ノート」による。

(33) 一九六七年四月二八日付け。神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵。

(34) 一九六七年三月一七日付けでモスクワから中野重治にあてて送られた書簡による。神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵。

(35) 本章は、断り書きのない場合は「小国の運命・大国の運命」（注三参照）による。

(36) 「プラハの春」とチェコ事件については、木戸蓊『東欧の政治と国際関係』有斐閣、一九八二年（第四章）、佐瀬昌盛『チェコ悔恨史――かくて戦車がやってきた』サイマル出版会、一九八三年、平田重明『埋もれた改革――プラハの春の社会主義』大月書店、一九八四年、林忠行『粛正の嵐と「プラハの春」――チェコとスロヴァキアの四〇年』岩波書店、一九九一年などを参照。

(37) 一〇周年記念集会には、堀田のほかに新日本文学会（リエゾンオフィス）から菊池章一が参加した。菊池「タシュケントの薔薇――アジア・アフリカ文学シンポジウムからの報告」『新日本文学』一九六九年一月号。

(38) 財団法人神奈川文学振興会・スタジオジブリ編『堀田善衛展――スタジオジブリが描く乱世。』県立神奈川近代文学館・財団法人神奈川文学振興会、二〇〇八年所収。

(39) 『世界』一九六八年一〇月号に掲載されたアピール「チェコ事件について世界の知識人に訴える」を指すと思われる。『世界』一九六八年一一月号、一二月号には、「世界の知識人は応える――日本の知識人のアピールへの回答」として、右のアピールに対する各国の知識人の返信が掲載されている。

(40) 一九六八年一〇月一五日付け。神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵。

(41) 「チェコスロヴァキアに対する同情について」『マイウェイ　My Way』一九六九年六月号（全集未収録）。

(42) 注二五参照。日本語訳は筆者による。なお、訂正が加えられた箇所については、訂正後の文章のみを引用する（訂正記号や削除された文字、単語などは引用しない）。

(43) 「小国の運命・大国の運命」では、堀田は一〇周年記念集会におけるスピーチでチェコ事件に言及したことを、「チェコスロヴァキアという国名はあげずに短い言葉で言い」と述べている（第九巻四七〇頁）。

(44) 神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵の自筆原稿。末尾には「一九六八年十二月十五日　於ドブジーシ　堀田善衛」とある。本稿の原文は英語であったと推測される。堀田は、この文書のコピーを野間宏あてに送った（日付なし、消印は判読不能、神奈川近代文学館・堀田善衛文庫所蔵）。なお、「小国の運命・大国の運命」には、チェコスロヴァキア作家同盟にメッセージを届けたことについての言及はない。

(45) 初出は、堀田善衛編・解説『現代人の思想』第一七巻「民族の独立」平凡社、一九六八年。

(46) 初出は、堀田善衛編『講座・中国』第四巻「これからの中国」筑摩書房、一九六七年、原題「インターナショナリズムの前途」。

(47) 「〈第三世界〉の衝迫力」と題された最終章の内容は、「エルネスト・〝チェ〟・ゲヴァラと現代世界――インタナショナリズムの前途」と重複している。

(48) 岩波書店、一九六六年。『堀田善衛全集』第九巻所収。

(49) いずれも、『ゲバラ選集』第四巻、青木書店、一九六九年に収録されている。

(50) 新左翼の知識人、運動家の間には中国の文化大革命に対する大きな支持ないし強い期待が存在した。馬場公彦『戦後日本人の中国像――日本敗戦から文化大革命・日中復交まで』新曜社、二〇一〇年、第四章・第五章など。栗原幸夫は、前掲「ＡＡ作家運動の軌跡」の中で、中ソ論争を当初より中ソ間の「パワー・ポリティクス」として批判的に捉えていたと回想する一方で、文化大革命については共感を持っていたと述べている。他方で、堀田は文革について目立った言及を行っていない。武田泰淳との対談『対話　私はもう中国を語らない』朝日新聞社、一九七三年には文革についてのやや詳しい言及があるが（八九―九八頁）、両者の対談の方向性は文革を中国固有の文脈の中で理解しようとするもので、文革を積極的に評価する立場に立つものとは言えない。

(51) 加藤が、中村真一郎、福永武彦と共に、雑誌『世代』に「カメラ・アイズ」のタイトルの下で連載し、『１９４６・文学的考察』真善美社、一九四七年にまとめられた一連の評論を参照。後に、「星菫派」をめぐる加藤の評論をめぐって、『近代文学』の荒正人や本多秋五との間に「星菫派論争」と呼ばれる論争が生じた（臼井吉見『戦後文学論争』上巻、番町書房、一九七二年参照）。

(52) 他方で堀田は、第二次世界大戦終結前後の中国で内戦を目の当たりにした体験に基づいて、政治主義に対しても独自の批判的視点を維持し続けた。

(53) 竹内泰宏は、第三回大会の準備会議にのぞんだ新日本文学会（リエゾンオフィス）が、「ＡＡ作家会議は、過去何回かの大会の努力と成果にかかわらず、まだ文学的な実質活動（翻訳の交換や、文学運動の相互紹介）によって会議を充実し、本来あるべき作家会議にするという点では、なお欠けている。ぜひとも作家会議にふさわしい実質的な内容を獲得して、アジア・アフリカ諸国の文学・文化・人民との交流と、文学的創造によって闘わなければならない」とする立場に立っていたと回想している。前掲「アジア・アフリカ作家会議の七年」、二二頁。

(54) たとえば、堀田は、第一回アジア作家会議の分科会「作家とその職業」に参加した際、最初に登壇したソ連のシーモノフが職業としての作家業とは無関係な詩の技法について話したこと、ソ連における書籍の膨大な発行部数について述べたことによって、ソ連に

は職業としての作家の困難が存在しないことが露呈し、大半の出席者を驚かせたと指摘している。「第一回アジア作家会議に出席して」『サンケイ』一九五七年一月一二日号。『堀田善衛全集』第一四巻所収。

(55) 前掲「我慢について」や、堀田善衛・三宅艶子・武田泰淳・竹内実による座談会「世界文明とアジア・アフリカ――第二回A・A作家会議の問題点」『新日本文学』一九六二年五月号における堀田の発言（七五―七六頁）などを参照。